

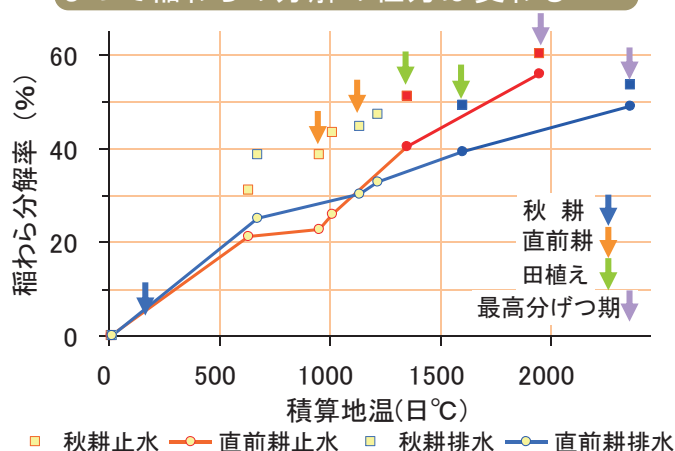
稲わら分解を指標とした有機水稻栽培安定化の作業体系

公益財団法人 自然農法国際研究開発センター 農業試験場



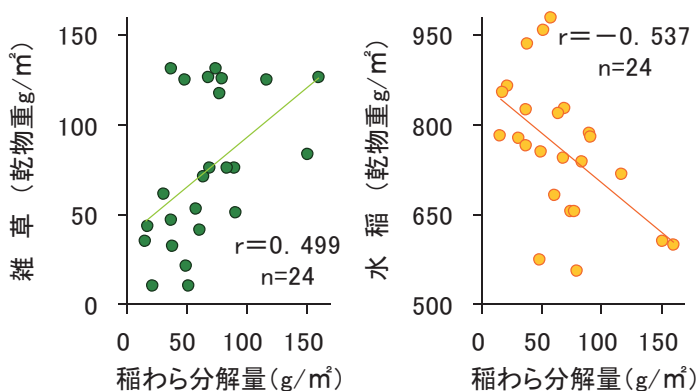
本技術は寒冷地の有機水稻栽培法の最適化をはかり、除草労力を削減し収量の安定化に貢献するソフト技術です。雑草要防除期間中(田植えから最高分げつ期まで)の、土壌中の急激な稲わら分解を抑え、耕耘・代かき・移植適期を定める、有機水稻栽培体系の総合的な目安を提供します。

1 耕耘や田植えのタイミング、排水管理によって稲わらの分解の仕方は変わる



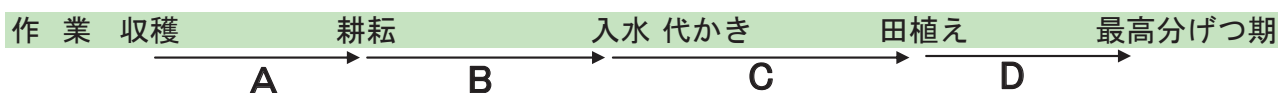
- 稲わらは耕耘時期や土壌水分・温度条件で分解率が変化します。有機栽培に適した土づくりは稲わらの分解率が指標となります。

2 田植え以降の稲わらの分解が水稻生育を抑制し、雑草乾物重を増加させる



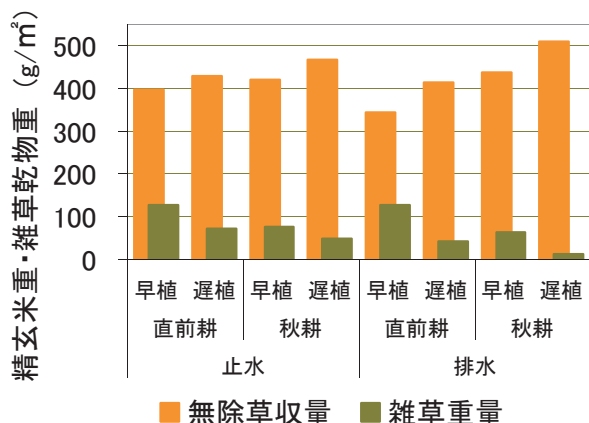
- 田植えから最高分げつ期までに分解する稲わら量が増えると、雑草が増え、水稻生育が抑えられます。

3 田植え時までに稲わらを出来るだけ分解させるための作業体系



稲わら 地表面接触 混入(排水) 混入(湛水) 土化

畑水で分解進む 飽和水分で分解進む



田植え～最高分げつ期(D)の稲わら分解を抑えると、コナギなど雑草害が抑えられ収量が増加し、除草コストが低下、経営が安定します。そのために、

- 収穫～耕耘(A)、耕耘～入水(B)、入水～田植(C)の間にできるだけ稲わらを分解させます。
- 田植えまで、稲わらが充分分解(50%)するには、積算温度が1500～1800日°Cを目安に、早い耕耘と遅い田植えで期間中の温度を確保します。
- 秋耕と、秋排水で土づくりを進めます。